

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Distribution of Russian libo-words in the scope of clausemate negation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: エブセエバ, エレナ, Evseeva, Elena メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1397">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1397</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 直接否定環境におけるロシア語 *libo*-words の分布

エブセエバ エレナ

キーワード： *libo*-不定表現，極性表現，否定のスコープ，フォーカス構造

## 1. はじめに

本稿では，ロシア語 indefinites(不定表現)<sup>1</sup>のうち，PSIs(Polarity Sensitive Items; 極性表現)の *libo*-words の分布について，先行研究における観察の不十分な点を補いながら，否定的環境を中心に記述を行う。

問題になる *libo*-words は，典型的な現実態文，とりわけ，過去または現在進行の肯定平叙文（つまり，concrete events (用語は Moltmann 1997 による)) において認可されず (cf.:(1))<sup>2</sup>，

- (1) \*On kupil *chto-libo* na rynke.  
he bought what-*libo* on market  
彼は市場で何かを買った。

用いられる代表的環境としては一般的に，以下のようなものが挙げられる<sup>3</sup>。

---

1 この用語はおおよそロシア語学で伝統的に用いられている「不定代名詞 (неопределённые местоимения (neopredel'jennye mestoimenija))」に対応している。ロシア語には，不定表現のシリーズが多く，*nibud'* 系列のもの (*nibud'*-words)，*koe* 系列のもの (*koe*-words)，*to* 系列のもの (*to*-words)，*by to ni bylo* 系列のもの (*by to ni bylo*-words)，*libo* 系列のもの (*libo*-words)，*ni* 系列のもの (*ni*-words)，*ljuboj* や *vsjakij* (*ljuboj*-words, *vsjakij*-words)，*ne* 系列のもの等がある。本稿では，*kto-libo*(*who-libo*; 誰か)や *chto-libo*(*what-libo*; 何か)のように，wh 要素に *libo* という要素を後接させることにより形成される語を，*libo*-words と呼ぶ。なお，先行研究間で系列の具体的呼び方は異なっている。Haspelmath(1997)，Progovac (1994)では series (*nibud'*-series)，Brown(1999)では words (*nibud'*-words)，Abels(2005)では phrases (*nibud'*-phrases) となっている。

2 ロシア語ではこの場合は specific な indefinites(*to*-words)が使われる。

- (1)' On kupil *chto-to* na rynke.  
he bought what-*to* on market  
彼は市場で何かを買った。

3 また，*libo*-words は生起環境に関し，もう一つのロシア語の不定表現，*nibud'*-words と大幅に重なるところがあるが，両系列の生起環境の対照は本稿が追求する主題ではない。

## 非現実態 (irrealis nonspecific) コンテキスト<sup>4</sup>

〈i〉主文の事象時より後に補文の事象時が位置するという関係にある補文(*hotet* ‘want’, *sobirat'sja* ‘intend’, *obeshat* ‘promise’ などの主語制御動詞が取る不定詞節, *prosit* / *poprosit* ‘ask’, *ugovorit* ‘persuade’ などの目的語制御動詞が取る不定詞節), それらの動詞がとる *chtoby* 節(3)や, 目的を表す *chtoby* 節(4))。

(2) Ja poprosil ego kupit' *chto-libo* na rynke.

I asked him to\_buy what-libo on market

私は市場で何かを買うように彼に頼んだ。

(3) Ja hochu, chtoby on priglasil *kogo-libo* na vecher.

I want COMP he invite\_SBJ whom-libo on the\_party

私は彼がパーティに誰かを誘うよう望んでいる。

(4) On poshel na rynek, chtoby kupit' *chto-libo* k uzhinu.

he went to market COMP to\_buy what-libo for supper

彼は晩御飯のために何かを買うため市場に行った。

### 〈ii〉命令形

(5) Kupi mne *kakuju-libo* gazetu.

buy me which-libo paper

私に何か新聞を買ってください。

### 〈iii〉モダリティ構文

*mozhno*, *mozhet* ‘can’ や *dolzhen*, *nado*, *neobhodimo* ‘must’ などを含むような構文は認可環境となる。これらの要素は deontic modality とともに epistemic modality も表すことができる(例えば以下の(6)には二通りの解釈がある)。また, epistemic modality を表す副詞を含む文も irrealis として見なされ, 過去または進行中の現在の文であっても, 認可される(cf.:(7))。

(6) *Kto-libo* dolzhen emu ob étom skazat'.

who-libo must to\_him about it say

誰かが彼にこれを言うべきである (言わなければならない)。

---

<sup>4</sup> ここで非現実態コンテキストとしてまとめたものはおおよそ Haspelmath (1997) で挙げられているものである。

誰かが彼にこれを言うに違いない。

(7) Skoree vsego, on tam *chto-libo* kupil.

faster of\_all he there what-libo bought

おそらく、彼はそこで何かを買ったでしょう。

〈iv〉 未来を表す文において

未来を表す節は一種のモダリティ要素を含むと考えることもできる。((8)は話し手の確信を表しているのである。)

(8) On *chto-libo* pridumaet.

he what-libo will\_think\_up(invent)

彼は何かを考えつくだろう。

### 分配的(distributive)コンテキスト

分配的(distributive)コンテキストは大きく〈i〉と〈ii〉の2タイプに分けられる。

〈i〉 多回的・習慣的イベントを表す述語

このコンテキストでは、過去または現在の肯定平叙文であっても *libo-words* が認可される(例えば、進行中の動作を表している非文法的な(9b)と定期的に繰り返されている文脈の文法的な(9a)を比較)。

(9) a. On postojanno *chto-libo* smotrit po televizoru.

he constantly what-libo watch on television

彼はいつも何かをテレビで見ている。

b.\*On sejchas *chto-libo* smotrit po televizoru.

he right\_now what-libo watch on television

彼は今何かをテレビで見ている。

〈ii〉 分配キーにあたる量化表現

いわゆる *relative clause headed by universal quantifier* のみならず、分配キーにあたる量化表現のスコープ内であれば、出現できる。この点は、英語などとは

異なっている(cf. (10b))<sup>5</sup>。

(10) a. Vse oni *čto-libo* čitali, kogdaja zashjel v komnatu.

all they what-*libo* read when I entered in room

私が部屋に入った時に、彼らは皆何かを読んでいた。

b. \*Everybody read *any* journal, when I entered the room.

### 条件文 (conditionals)

反事実条件文(counterfactual conditional)(cf.(11))であるか、普通の条件文(non-counterfactual conditional)(cf.(12))であるかに関係なく、*libo*-wordsが生じることができる。なお、先行研究ではあまり触れられていないが、条件文を前件(条件節)と後件(主節)に分けた場合、ロシア語では前件、後件、どちらの節においても、*libo*-wordsが認可される。

(11) Esli by on tam *kogo-libo* vstretil,

if SUBJ.P he there whom-*libo* met

on skazal by *komu-libo* iz nas.

he told SUBJ.P to\_whom-*libo* from us

あそこで誰かと会っていたら、彼は私達の誰かに言ったはずでしょう。

(12) Esli ja poedu *kuda-libo* za granitsu,

if I go to\_where-*libo* behind broad

ja privezu tebe *čto-libo* v podarok.

I will\_bring to\_you what-*libo* in present

どこか外国に行けば、私はあなたに何かをプレゼントとして持ってくるよ。

### 疑問文 (question)

(13) Vy vstretili tam *kogo-libo*?

you met there whom-*libo*

あなたはそこで誰かと会いましたか。

---

<sup>5</sup> (10)では分配キーにあたる量化表現は $\forall$  (universal quantifier)の *vse* 'all'である。

## 比較基準 (standard of comparison)

(14) On provodit na rabochem meste vremeni bol'she, chem *kto-libo*.

he spends on working place time more that who-*libo*

彼は職場で誰よりも長い時間を過ごしている。

## SCOPE OF FEW<sup>6</sup>

(15) *Nemnogie* studenty *čto-libo* znajut ob etom.

few students what-*libo* knows about this

ほとんどの学生はこれについて何も知らない。

(16) Malo kto *čto-libo* ponjal.

few who what-*libo* understood

何かが分かった人は少数派です。

## TOO-CONSTRUCTIONS

(17) On slishkom ostorozhen, chtoby poiti na *kakoi-libo* risk.

he too cautious that\_SUBJ.P. go on *kakoi-libo* risk

彼は何らかのリスクを取るのには慎重すぎる。

## 否定的環境

否定的環境について議論が行われる場合、直接否定と間接否定という概念が問題になることが多い。

## 上位節否定 (superordinate negation)

上位節否定に関して共通して言えるのは、補文が不定節にせよ定節にせよ、基本的に対応している肯定文において *libo*-words が認可される場合 (上記の(2)と比較) は、主文否定の場合も基本的に認可される点である。

---

<sup>6</sup> SCOPE OF *FEW* に対し、同じく DE 環境とされる SCOPE OF *ONLY* では不自然となる。SCOPE OF *ONLY* のコンテキストでは *libo*-words の使用は不自然であるというのが、本稿の著者および文法性判断に関する協力者から得られた判断であり、Pereltsvaig(2000)の結果とは異なる結果となっている。

(i) *Tol'ko* Adam čital ??*kakoj-libo* žurnal.

only Adam readPST which-*libo* journal

“Only Adam has read any journals.”

Pereltsvaig(2000: (3d))

(18) Ja ne prosil ego pokupat' chto-libo na rynke.

I Neg asked him to\_buy what-libo on market

私は彼に市場で何かを買うように頼んでいない。

一方、肯定的コンテキストで *libo*-words が認可されない補文に関して言うと、他の環境と同様、補文述語によって表されている事態の実現が前提になってはいけないという条件がある。

このことから例えば、叙実動詞 *znat'* 'know' の補文のように、不定表現が表す指示物の存在が前提になっているような構文では認可されないのである。

(19) \*Ja ne znal, chto Sasha uzhe s kem-libo razgovarival

I Neg knew that Sasha already with whom-libo spoke

po etomu povodu.

on this matter

私はサーシャがその件についてすでに誰かと相談していたと知らなかった。

一方、*govorit'* 'tell', *skazat'* 'say' といった「発話動詞」の場合は *libo*-words の認可が話者の認識によって左右される。つまり、不定表現が表す指示物の存在が話者にとって不特定であると捉えられている場合、*libo*-words が使える。例えば、以下の例は「彼が誰かを見たこと」「彼が見た相手」の存在が前提になっていない場合、つまり、彼の発言とは別の根拠から話者が「彼が誰かを見た」という情報を認識しているのでない場合、当該要素は文法的である。

(20) a. On ne govoril, chto videl tam kogo-libo.

he Neg told that saw there whom-libo

彼は誰かを見たと言っていない。

b. On govoril, chto videl tam \*kogo-libo .

he told that saw there whom-libo

彼はあそこで誰かを見たと言った。

意味的否定 (implicit negation) : complement of absence や *bez* 'without' (cf.:(21)) や *prekratit'* ('stop', 'quit' 「(ある動作を) やめる, 中止する」) のようなある事態・動作の停止を表すような述語や *oprovergnut'*, 'refute', 'disprove' 「反駁する」, *otkazat'sja* 'refuse' 「断る」 (cf.(23)) や *otritsat'* 'deny', 'refuse' 「否定

する」や *zapretit'* / *zapreshat'sja* 'forbid', 'be forbidden', 'prohibit' 「禁止する／される」や *izbegat'* 'avoid' 「避ける」といったタイプの述語)<sup>7</sup>

(21) On spravitsja bez *kakoj-libo* pomoshchi.

he will\_manage without which-libo help

'He will manage without any help.' (Pereltsvaig 2000:(15a))<sup>8</sup>

彼は何らかの手助けなしでもできる (と思う)。

(22) My otkazyvaemsja vstat' na storonu *kogo-libo* v étom dispute.

we refuse stand on side whose-libo in this dispute

この議論では誰かの側に立つことを断る。

続く 2 章において、先行研究における *libo*-words 分析の要点を整理する。その中で、同じく不定表現である *ni*-words は、ほぼ同節否定とそれ以外という形で *libo*-words と相補分布をなしていると Pereltsvaig(2000, 2004), Haspelmath (1997)が記述している点について、妥当性を欠くものである点を指摘する。その

---

<sup>7</sup> 意味的否定にはよく 'doubt', 'forget' などのような意味として否定を含意するいわゆる *adversative predicates* が含まれることがある。しかし、例えば、ロシア語の *somnevaj'sja* 'doubt' の取る補文では *libo*-words が認可される (以下の例を参照) 一方、意味的には肯定的な意味になる主文否定であっても、*libo*-words の文法性は変わらない (ib.)

(i) a. Ja somnevajus', chto on videl tam *kogo-libo*.

I doubt that he saw there whom-libo

私は彼がそこで誰かを見たと思えない。

b. Ja ne somnevajus' v tom, chto Sasha prochital *kakoj-libo* zhurnal.

I Neg doubt in the\_fact that Sasha read which-libo journal

サーシャが何か雑誌を読んだに違いない。(lit.: 読んだことを疑わない)

なお、'adversative predicate' についても、やはり述語によって表されている事態の実現が前提になっているようなコンテキストでは *libo*-words は容認困難である。例えば、Klima(1964)が 'affective' な要素として挙げている 'adversative predicate' の *surprised* に対応しているロシア語の 'byl udivljen' が取る補文述語が過去の動作を表している場合は、動作の実現自体は前提になっていることになり、当該の要素の認容度が極めて低い。

(ii) Ja byl udivljen tem, chto on znal ob étom ?~\**chto-libo*.

I was surprised by\_the\_fact that he knew about this what-libo

私は彼がこのことについて何かを知っていたことに驚いた。

以上のことからロシア語 *libo*-words に関して 'adversative predicate' を独立した認可環境として区別する必要があるかどうかについては疑問が残り、詳しい考察は今後の課題としたい。

<sup>8</sup> 本稿が考察の対象とする不定表現のグロスには本稿の記述法に統一させている。



上で 3 章では、そのような先行研究における記述の不十分さを補うため、*libo*-words が同節否定と共起する場合の中でも特に、否定辞よりも前に位置している例を中心にとりあげ、どのような条件を満たした場合にそのような使用が可能となるか、主題化可能性とのかかわりから考察を行う。

## 2. 関連先行研究

### 2.1 意味論的研究での *libo*-words の分析 (Pereltsvaig(2000, 2004)より)

Pereltsvaig(2000, 2004)では、*libo*-words が、*ni*-words が認可される同節否定環境<sup>9</sup>で認可されず (以下の(23)を参照)、また逆に *ni*-words は *libo*-words が認可されるような環境において認可されないとしている。

(23) \*On *kogo-libo* ne vstretil. (=Pereltsvaig 2000:(11))

he whom-*libo* not met

“He didn’t meet anyone.”

(23)’ On *nikogo* ne vstretil.

he *ni*-whom not met

“He didn’t meet anyone.”

そして、Pereltsvaig(2004)では(24)のように述べた後、そうした両者の相補分布を‘*bagel problem*’と呼び、この問題を、分散形態論(distributed morphology)の枠組みを用い形態論的阻止(blocking)が起こったものとして分析している<sup>10</sup>。

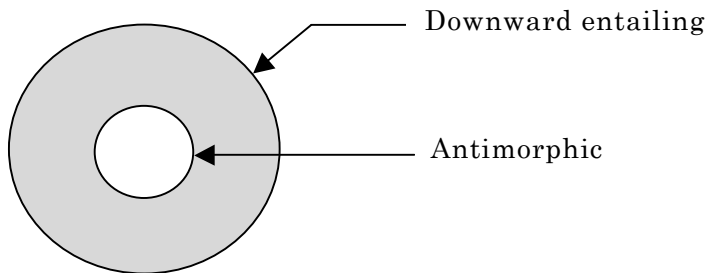
---

<sup>9</sup> 否定要素が現れない文でも用いられることのある NPIs の意味論アプローチからの分析として、これまでに提案されている大きな二つの理論的流れとして、monotonicity-based approach (MBA ; 単調性にもとづくアプローチである (Ladusaw(1980)等)。そこでは単調減少性 (研究者により、単調減少性と同じ性質を指すのに、下方含意(Downward Entailment)という術語を用いる場合がある) が広範囲の NPIs の認可条件を規定する上で重要な役割を担う。)と veridicality-based approach (VBA ; 真実性にもとづくアプローチである (Zwarts(1995), Giannakidou(1998)等)。そこでは非真実性が広い範囲の PSI の認可条件を規定する上で重要な役割を担う。)とがある。そのような二つの流れを受け Pereltsvaig(2000)は、ロシア語の *ni*-words, *libo*-words, *nibud*’-words が生起可能/不可能なのはそれぞれどのような場合かを整理し、その分布を説明する上で MBA と VBA, どちらが有効であるかについて比較している。掲げられた諸例文の文法性判断から、Pereltsvaig(2000)は、*libo*-words の生起は、*ni*-words の生起環境である同節否定以外の環境、つまり DE 環境とほぼ一致しているとし、*libo*-words の分布に関しては MBA の方がより有効であるとしている。

<sup>10</sup> Pereltsvaig (2004)は、語彙選択に際し、二つの要素が類似した条件を持っている

(24) *ni-* and *libo-* items appear in complementary distribution,... This problem is illustrated graphically in (26) below. *Ni-* items are licensed in antimorphic contexts, which are represented by the inner circle on the diagram, whereas *libo-* items occur only in the shaded bagel-shaped area covering downward entailing but not antimorphic contexts. Hence, the “Bagel Problem”.

(25)(=Pereltsvaig 2004: (26) )



## 2.2 意味論的マップを用いた言語類型論的研究における *libo-*words の扱い

### 2.2.1 Haspelmath(1997)

Haspelmath(1997)は、諸言語における不定表現の分布状況を、用法を言語普遍的に整理するための意味論的含意マップ(implicational map)上で、各不定形式がどの範囲に広がって用いられるか整理した研究である。ここで、ロシア語不定表現の分布を整理した図を Haspelmath(1997:71)から引用しておく。

---

場合、条件がより厳密に指定されている要素の方が採用されるという考え方にまず従っている。そして、*libo-*words と *ni-*words は DE 環境という意味論的条件指定は基本的に同じである一方、*ni-*words についてのみ同節否定環境という統語論的な条件指定があるとしている。これによって、*libo-*words は *ni-*words より広い使用可能環境を持っていることになるので、*ni-*words が採用される環境では *libo-*words は使われない。

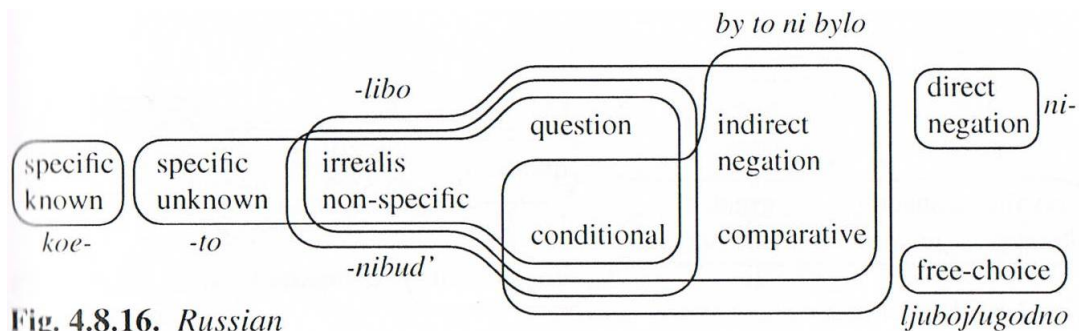


Fig. 4.8.16. Russian

図 1 Haspelmath(1997:71)によるロシア語不定表現の意味論的含意マップ

ここでは、ロシア語 *libo*-words について、意味論的マップ上では、同節否定にあたる *direct negation* の部分は囲まれていないことが分かる。

## 2.2.2 Tatevosov (2002)

一方、同じく類型論的アプローチの枠組みで分析を行っている Tatevosov (2002)は *libo*-words は同節否定環境にある場合に関し、英語の関連例も挙げながら、主語と目的語の位置の非対称性について言及している。(Tatevosov 2002:139-140)

(26) a. Nobody came. (\*Anybody didn't come.)

b. I saw **nothing**. / I didn't see **anything**.

(27) a. *Nikto / \*kto-libo / \*kto by to ni bylo ne prihodil.*

*ni-who who-libo who by to ni bylo Neg came*

誰も来なかった。

b. *Ja ne vizhu nikakih / kakih-libo / kakih by to ni bylo prichin*

*I Neg see ni-which which-libo which by to ni bylo reasons*

*ne hodit' tuda.*

*Neg to\_go there*

あそこに行かない理由は見当たらない。

ただし、主語と目的語を区別すべき例を掲げながらも、Tatevosov(2002)は、Haspelmath(1997)の意味論的マップを修正しまとめる際には、その意味論的マップ（以下の図2）中では、*libo*-words の用法は、同節否定環境（DIRECT

NEGATION) までは広がらない形で図が描かれている。

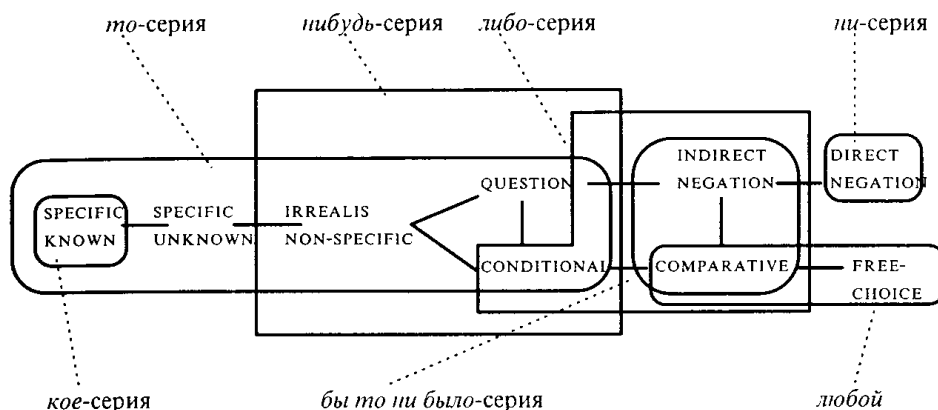


Схема 6.4. Русские неопределенные местоимения на семантической карте

図2 Tatevosov(2002:141)によるロシア語不定表現の意味論的含意マップ

なお、後に *libo-words* の分布について詳しく論じるように、Tatevosov(2002)の記述にも、まだ不十分な部分がある。

次の 2.3 節では従来の研究で不十分だった点を指摘し、3 章では、見落とされていた部分を含め、*libo-words* の使用条件をより詳しく記述する。

### 2.3 先行研究の問題点

上述した同節否定環境での *libo-words* の反認可や、*libo-words* と *ni-words* の相補分布（‘bagel problem’）という記述が、とりわけ *libo-words* に関し正しくない点である。実際には、*libo-words* が同節内否定辞と共起し、否定スコープ内に解釈される例は数多く見られる<sup>11</sup>。（次に掲げる例では *libo-word* は *ni-word* と置き換えることもできる。）

<sup>11</sup> ただし、確かに、同節否定の場合、*ni-words* が使われる方が一般的である。*libo-words* の同節否定環境での使用にはいろいろな要因が影響している。例えば、後述するように主題化可能性とかかわり、単文においては関係節や修飾節などによって修飾され意味的に限定されている *libo-word* が同節内否定辞と共起しやすい点などが挙げられる。（一方、同節否定の場合でも、*libo-words* が用いられやすい構造、環境もある。）つまり、同節否定辞と共起する例としては *ni-words* の方が多いとは言えても、決して‘bagel problem’がというような、相補分布にはなっていないのである。

(28) Ja eshche ne sovetovalsja s *kem-libo* po ètomu povodu.

I still Neg consulted with whom-*libo* on this matter

私はそのことについてまだ誰とも相談していない。

さらに, *ni-word* と *libo-word* は同様な環境で用いられるだけでなく, *ni-word* と *libo-word* が同節内で共起することもある (以下の例を参照)。

(29) *Nikogda* ne govorite vash parol' *komu-libo*.

*ni\_when* Neg tell your password to\_who-*libo*

絶対に誰にも自分のパスワードを教えないください。

(30) Lichno ja *nichego* protiv *kogo-libo* ne imeju.

personally I *ni-what* against whom-*libo* Neg have

個人的には私は誰に対しても何も不満を持っていない。

(31) Ja *ni razu* ne videl *kogo-libo* iz nih v p'janom sostojanii.

I *ni* once Neg saw whom-*libo* from them in drunken state

彼らの誰かを酔っぱらった状態で見ることがない。

続く 3 節では, *libo-words* を含む文の語順による自然さの違いに関し, その nonspecific indefinites という意味的性質をもとにした, Focus や Topic になりにくさという, 機能文法的制約が働くことによるものであることについて, さらにさまざまな例をあげながら考察する。

### 3. Topicalizability・Focalizability と *libo-words* の認可について

#### 3.1 *libo-words* が主語以外の場合

本稿では *libo-word* は基本的に同節内否定辞と共起できると考える。その一方で, 以下で示すように, 否定文で *libo-word* が生起できる位置に関しては一定の制限があると指摘し, そうした制限はフォーカス構造の一般的な要求に起因しているものであると考える。具体的に問題となるのは, 以下のようにまとめることができる機能文法的条件 TF である<sup>12</sup>。

条件 TF: 語順の自由度が高いロシア語ではあるが, その際, 主題位置 (文頭) には主題化にふさわしい要素が, 焦点位置 (動詞句の前あるいは文末) には焦点

---

<sup>12</sup> ここでは, *libo-words* が認可されるため必要な, 一般的な条件をまず満たしていることは前提としている。

化にふさわしい要素がきていること。

とりわけ、否定辞を含む文において、基本語順の場合、否定辞より前にある位置は主題の位置であるか、フォーカス要素がくる位置である。

その一方で、*libo-word* は *nonspecific indefinite* という内在的意味を有しているが、それは本来、主題や焦点になるには適さない性質のものであり、*libo-word* は本来フォーカスにも、主題にもなりにくいのである。

以上の二点を考えると、否定辞を含む文において、*libo-word* が否定辞より前に来ることに對して制限がかかることになる。

ここであらためて Pereltsvaig(2000)の例を見て欲しい ((32))。(32)の非文法性から分かるように、目的語の場合は、否定辞の前に置くと当該位置はフォーカス要素がくる位置なので、そのことと今度は *libo-word* の *nonspecificity* という意味からくるフォーカスになりにくさとの間で齟齬が生じ、不自然な文になる。

他方、Pereltsvaig(2000)の例の語順を変えた(33)のように、*libo-word* が元の位置、つまり、動詞の後ろに位置している場合、当該位置は特別の音調を伴わない場合、フォーカスとしてでなく、*ground* の中でも非トピックである *tail* として受け取られうる位置なので、同節否定環境であっても *libo-word* の使用に問題がない。

(32) \*On *kogo-libo* ne vstretil. (Pereltsvaig (2000: (11))

he whom-*libo* not met

“He didn’t meet anyone.”

(33) On ne vstretil *kogo-libo*.

he not met whom-*libo*

彼は誰とも会わなかった。

このように、元の位置で認容される *libo-words* (目的語など) でも、否定辞の前に移動すると、文は基本的に非文法的になる。

ところが、*libo-words* の否定辞の前への移動は一様に認容度が低いわけではなく、ある種の例については比較的認容度が高い。とりわけ、*libo-word* が否定辞より前に来る例では、*libo-word* を含む要素がトピックとして解釈され得る場合がほとんどである。*libo-word* は通常、不特定の対象を指すと言える。しかし、*libo-words* が否定辞より前に来られる例のほとんどは、*libo-words* が限定された

領域内の対象を表すという点で共通している。

*libo-words* が否定辞より前に来られる具体的な例としては以下のような場合が挙げられる<sup>13</sup>。

(i). 特定の集団の中の不特定の対象を指す場合や（特定の人物との）対比が含意されている場合など。

例えば、*libo-word* に *iz nih* (from them) や *drugoi* (other) といった要素が付いたり、*libo-word* が関係節などによって修飾されたりしている場合である。

(34) Kogo-libo, kto mozhet obygrat' Federera, ja ne vizhu.

whom-libo who can beat Federer I Neg see

フェデラーに勝てる誰かが、私には見えない。(勝てる人がいるように見えない。)

(ii). *libo-words* が形容詞をもとに作られている (*chto-libo* などではなく *kakie-libo* などのような形をしている) 場合。同様な例でも *libo-words* が単独で代名詞として使われた場合は非文法的になる(cf.:(36a))。(また、これらの *libo-words* は元の位置では自然である点にも注意されたい(cf.:(36b)).) こうした名詞句では *kakie-libo* は一見意味的には空虚に見え<sup>14</sup>、実際、日本語などに訳する場合、訳されないことも多い。

---

<sup>13</sup> なお、本文で挙げたケース以外に、*libo-word* が単独で否定辞より前に来られる例としては、以下のように、基本語順(ib)からは変更があり、動詞がフォーカス位置の一つである文末位置を占めているような例が挙げられる。

(i) a. Nikakie prinuditel'nye pokazaniya nashi sotrudniki davat'

ni-which forced testimony our officials to\_give

*kogo-libo* ne vynuzhdali.

whom-libo Neg compelled

b. Nashi sotrudnikine vynuzhdali *kogo-libo* davat' *nikakie*

our officials Neg compelled whom-libo to\_give ni-which

prinuditel'nye pokazaniya.

forced testimony

私たちの部下は誰からも無理やりに証言を引き出そうとしていませんでした。

<sup>14</sup> ロシア語 *kakoj* の形式的意味を記述する中で Yanovich(2008)は、その意味が一見 *vacuous* に見える場合があるが、それは *determiner* というより *adjective* に近い意味を有していると考えられると論じている。

(35) *Na kakie-libo* opredelennye uchebniki my ne orientiruemsja.  
 on which-*libo* particular textbooks we Neg orientate\_ourselves  
 私たちは何らかの特定の教材を見本にしていない。

(36) a. \**Na kogo-libo* my ne orientiruemsja.  
 on whom-*libo* we Neg orientate\_ourseves  
 b. My ne orientiruemsja na *kogo-libo*.  
 we Neg orientate\_ourseves on whom-*libo*  
 私たちは誰も見本にしていない。

(37) *Kakogo-libo* osobogo diskomforta on ne chustvova.  
 which-*libo* special discomfot he Neg felt  
 何らかの特別な違和感を彼は感じていなかった。

### 3.2 *libo*-words が主語の場合

続いて *libo*-words が主語あるいは主語の一部である場合について見ておきたい。上述の通り、Tatevosov(2002:140)は以下の例を挙げ同節否定では、目的語の *libo*-words が許される一方、主語としては許されないという記述を行っている<sup>15</sup>。(一方、*ni*-words に関しては、こうした主語と目的語との間の非対称性が見られない。) (cf.:(26),(27))

しかしながら、その記述は不完全なものである。確かに、主語が *libo*-words の場合、非文になることが多い。主語の *libo* -words を含む文の認容度の低さは、やはり、上述の機能文法的条件 TF の存在に起因していると言える。

とりわけ、主題位置（文頭）には主題化にふさわしい要素が来なければならないという条件がある一方で、上述のとおり、本来 nonspecific indefinites は、主題や焦点になるには適さない性質のものである。さらに、そのため、*libo*-word

<sup>15</sup> *libo*-words は特定の構文の中で使用された場合は、否定辞に対する位置に関係なく認可され、否定のスコープ内に解釈されるのである。それは、例えば、条件節、二重否定を含む構文、理由を表す節、目的を表す節 *chtoby* 節、Baker (1970)のいわゆる「特殊な述語」(i)が取る節などである。しかし、この問題は特別に扱うべき問題として考え、本稿ではこうした構文を扱わないことにする。

(i) Nadejus', chto *kto-libo* ne vosprimet skazannoe kak lichnuju obidu.  
 I\_hope that who-*libo* Neg take what\_has\_been\_told as personal offence  
 (私が) 言った言葉を誰かが個人的な侮辱として受け止めることはないと思いたい。



が主語である場合特に、

・主題になりやすさのハイアラキーにおいては主語が高い位置を占めていることとの間で齟齬が生じやすく、結果的に、主語の *libo-words* を含む文が不自然となることが多いのである。

ところが、主語の *libo-words* を含む文が認容される場合がある。

まずは、目的語の場合もそうであったように、*libo-words* が主語の役割を果たしているより大きな要素の一部となっている場合は使用可能である。例えば、(38)は不定節の一部、(39)(40)は名詞句の一部になっている場合である。

(38) Ubezhdat' ego v *chjem-libo* ja ne stal.

convince him of what-*libo* I Neg tried

私は彼を何かに対して納得させようとはしなかった。

(39) No takaja partija, sozdannaja dlja *kogo-libo* ili pod *kogo-libo*,

but such party established for whom-*libo* or under whom-*libo*

nikogda ne budet imet' uspeha v obshchestve.

never Neg will\_be have success in society

誰かのために、もしくは誰かに合わせて作られたような政党は社会から支持されることは決してない。

(40) Predpolozhenija i dovody *kogo-libo* ne mogu sluzhit'

speculations and arguments of\_who-*libo* Neg can serve

dokazatel'stvami.

as\_pieces\_of\_evidence

誰かの推測や議論は証拠にはなれません。

また、それ以外にも主題になりにくい性質が改善され、文頭で主題として用いられるパターンは基本的に先にあげた主語以外の要素のパターンと共通している。とりわけ、preverbal な位置で *libo-words* が生起しやすい例には以下のようなものがある<sup>16</sup>。

---

<sup>16</sup> Wh 要素と他の要素との語順の違いにより、文法性に差がでるある種の現象 (Intervention Effect) に関し、その原因を介在要素 (intervenors) の主題化可能性の差に求める研究としては (Tomioka(2007)等) がある。また、Aguiar&Rodrigues (2008)はブラジル・ポルトガル語の例を挙げ quantified DPs は基本的に主題化不能であるが、i) 制限的修飾表現を当該 quantified DP が明示的に伴う場合や、ii) 文脈

(i). 特定の集団の中の不特定の対象を指す場合や（特定の人物との）対比が含意されている場合など。例えば、*libo-word* に *iz nih* (from them) や *drugoj* (other) といった要素が付け加えられる、または、*libo-word* が関係節などによって修飾されたりしている場合である。例えば、(41)は不自然な例であるが、(42)では認容度がかなり改善されている。同様の例を次に2つ掲げておく。

(41)\**Kto-libo* ne mog kupit' ètu mashinu. Ona slishkom dorogaja.  
who-libo Neg could buy this car it too expensive  
誰かがこの車を買ったはずがない！高すぎるんだもの。

(42) *Kto-libo* {*iz nih* / *drugoj*} ne mog kupit' ètu mashinu.  
who-libo from them other Neg could buy this car  
Ona slishkom dorogaja.  
it too expensive  
{彼らの | 別の} 誰かがこの車を買ったはずがない！高すぎるんだもの。

(43) *Kto-libo* iz nashih sotrudnikov tuda ne ezdil.  
who-libo from our officials there Neg went  
私たちの社員は誰もあそこに行っていない。

(44) *Iz-za* kustov vyshel zdorovennyj kobel' porody boksjera bez  
from bushes came\_out huge male\_dog of\_race boxer without  
osheinika. Hozjaina i voobshche *kogo-libo* poblizosti ne bylo.  
dog-collar owner and at all who-libo nearby Neg was  
茂みの中から首輪をつけていないボクサーという種類のすごく大きな犬  
が現れてきた。持ち主や他の誰かが近くにはいなかった。

(ii). *libo-words* が *kakoi-libo* などのような、形容詞的要素である場合。

(45) *Kakih-libo* prepjatstvij so storony administratsii ne bylo.  
which-libo obstacle from side of\_administration Neg was  
上層部による何らかの妨害はなかった。

---

から当該 quantified DP の限量化領域 domain が限定される場合は、そうした制限が緩和されると指摘している。

(46) *Kakih-libo dokazatel'stv u nas ne bylo.*

which-libo pieces\_of\_evidences at us Neg had

私たちには何らかの証拠はありませんでした。

しかし、目的語とは違って、主語の *libo-word* を否定辞と動詞の後に位置させたとしても、文法的にならないことが多い。例えば、次の例では、主語が動詞の後ろに位置していても、不自然さが残る<sup>17</sup>。

(47) A *étoj mashinoi voobshche ne interesovalsja ???kto-libo.*

and this car at\_all Neg had\_interest who-libo

この車に関しては誰も興味を示していなかった。

(48) *Vchera mne ne zvonil ???kto-libo.*

yesterday to\_me Neg called who-libo

昨日は誰も私に電話をしていない。

これらの例が自然に聞こえるためには文頭に来ている要素が対比トピックとしてイントネーション上卓立させられねばならない。

それは、主語である *libo-word* が、否定辞および動詞の後ろの位置する語順をとりながら不自然とならないためには、他の要素の生起位置とかかわって、その位置がフォーカスととられられる位置であってはならないという条件も働くためである。(ロシア語では、Topic 位置は基本的に文頭であり、フォーカス位置は(否定辞および)動詞の前、または、文末と考えられる。)しかし、一般的には主語を否定辞と動詞の後の位置に置くとそこは同時に文末の位置になるので、*libo-word* に限らず、主語が意味的にフォーカスでない文については、文法性が著しく下がるのである。

(49) # *Vchera mne ne zvonil Sasha.*

yesterday to\_me Neg called Sasha

サーシャは昨日私に電話をしませんでした。

(50) # *Étoj mashinoj ne interesovalsja on.*

this car Neg was\_interested\_in he

彼はこの車に興味を示さなかった。

---

<sup>17</sup> 主語の *libo-words* を含む文の文法性判断にはかなり微妙なところがある。こうした文末位置に主語が位置している文の判断には方言差や個人差もあると思われる。

## まとめ

本稿では主な論点として、ロシア語 *libo*-words が使用されるために満たさないとはいけない条件として、本来使われる文脈での使用に加え、語順によりその認容度に差が生じることを説明するには、機能文法論的条件 TF（主題や焦点となる要素に課せられる条件）をもあわせて考慮することにより、先行研究で記述が不十分であった部分を含め、より十全な分布の記述が行えることを論じた。

## 参考文献

- Abels, K. 2005. Expletive negation in Russian: a conspiracy theory. *Journal of Slavic Linguistics* 13(98): 5-74.
- Aguiar, C. and Rodrigues, C. 2008. The internal DP structure of topicalized quantified expressions. abstract of the talk at Polinsky Lab. Meeting (3<sup>st</sup>/Apr/2008), Harvard University  
(<http://www.fas.harvard.edu/~herpro/files/Aguiar&Rodrigues.pdf>).
- Baker, C. L. 1970. Double negatives. *Linguistic Inquiry* 1: 169-186.
- Brown, S. 1999. *The Syntax of Negation in Russian: A Minimalist Approach*. CSLI.
- Giannakidou, A. 1998. *Polarity Sensitivity as (Non)Veridical Dependency*. John Benjamins.
- Haspelmath, M. 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford University Press.
- Klima, E. S. 1964. Negation in English. in Fodor, J. and Katz, J. (eds.) *The Structure of Language*, 246-323, Prentice-Hall.
- Ladusaw, William. 1980. On the notion "affective" in the analysis of negative polarity items. *Journal of Linguistic Research* 1:1-16.
- Moltmann, F. 1997. *Parts and Wholes in Semantics*. Oxford Univ. Press.
- Pereltsvaig, A. 2000. Monotonicity-based vs. veridicality-based approaches to negative polarity: evidence from Russian. In *Formal Approaches to Slavic Linguistics: The Philadelphia Meeting 1999*, 328-346. Michigan Slavic Publications.

- Pereltsvaig, A. 2004. Negative polarity items in Russian and the ‘bagel problem’. In Przepiorkowski, A. and Brown, S. eds. *Negation in Slavic*. Slavica Publishers.
- Progovac, L. 1994 *Negative and Positive Polarity*. Cambridge Univ. Press.
- Tatevosov, S. G. 2002. *Semantika Sostavljajushchix Imennoj Gruppy: Kvantornye Slova (The Semantics of the Constituents of the NP: Quantifier Words)*. Moscow: IMLI RAN.
- Tomioka, S. 2007. Pragmatics of LF intervention effects: Japanese and Korean wh-interrogatives. *Journal of Pragmatics* 39: 1570–1590.
- Zwarts, F. 1995. Nonveridical contexts. *Linguistic Analysis* 25:286-312.
- Yanovich, I. 2005. Choice-functional series of indefinites and Hamblin semantics. Presented at SALT 15, UCLA.